

**005** APR. 2006

#### Contents

CGS IWS 2006 に向けて	— I	
特集:ジェンダーフリーバッシング	2	,
CGS からのニュース	<del></del> 4	ŀ
日本からのニュース	<del></del> 6	,
アジアからのニュース	<del></del> 8	,
CGS IWS 2006 Comes Next	1	
Feature : Gender Free Bashing	2	,
News from CGS	<del></del> 4	+
News from Japan	<del></del> 6	)
News from Asia	<del></del> 8	,

CGS Newsletter



国際基督教大学ジェンダー研究センター Center for Gender Studies International Christian Univiersity

181-8585東京都三鷹市大沢 3-10-2 ERB301 tel & fax: 0422-33-3448 cgs@icu.ac.jp http://subsite.icu.ac.jp/cgs/

ERB 301, 3-10-2 Osawa Mitaka Tokyo 181-5858 Japan tel & fax: +81-422-33-3448 cgs@icu.ac.jp http://subsite.icu.ac.jp/cgs/

2006年4月1日CGS Newsletter編集委員会発行

## ₽IWS2006 に向けて

この春、ICU ジェンダー研究センターは 3 年目を迎え、そしてジェンダー・セクシュアリティ研究プログラム (PGSS) は 2 年目になります。そして PGSS の記念すべき一期生がこの 3 月に卒業し、それに続く登録希望者も急速に増えつつあります。その背景には、熱意あふれる教員や講師たちによる講義・講演会の数々はもちろんのこと、総勢 30 余の学生スタッフの質とモチベーションの高さがあります。自主的に読書会を次々と企画し、海外の人々にも臆することなく接っしています。大学の研究所と呼ばれるものは数あれど、これほど学生の力に負っている所はないといっていいでしょう。

さて、2004年から毎年行っているこの国際ワークショップ、第一回は「社会科学的視座」から、第二回は「人文科学的視座」から、それぞれアジアにおけるジェンダーと、広い意味での平和・安全・共生を扱ってきました。2006年度の第三回は「自然科学的視座」から検討します。自然科学は自然界の普遍的法則を扱う学問とされ、ジェンダーとは一見無関係のように思われています。しかし、自然科学の持つ普遍性こそが今最もジェンダーという視点から再点検が必要な領域です。生命科学においてこれまで検討されることなく用い

# 2006 International Workshop

In spring, the Center of Gender Studies at ICU will commemorate its second year and the first students of the Program in Gender and Sexuality Studies (PGSS) will graduate in March, with many more interested students in line to take their place. All this is due not only to the passion and energy of the many lecturers and professors but also to the high quality and motivation of about thirty dedicated student staff members who have voluntarily organized reading groups and enthusiastically communicated with people from other countries. There cannot be many other university research centers which depends so much on the energy of students.

Since 2004, we have conducted an International Workshop each year. The first workshop focused on "Social Science Viewpoints" and the second on "Humanities Viewpoints". They each dealt with the issues of gender in Asia as well as peace, security and co-operation in the region. The third workshop, in 2006, will focus on "Natural Science Viewpoints". As the Natural Sciences deal with the universal laws of the natural world, it does not at first seem to be a discipline which has much in common with Gender Studies. However, it is precisely this universality present in the Natural Sciences which needs to be re-examined from a gender perspective. The male/female division which has been used unquestioningly in biology must be re-considered in terms of its influence on the gender framework between men and women today.

られてきたオス/メスという区別がどれほど男性/女性とい う現在の強固なジェンダー規範に大きく影響を与えたかと考 えるべきでしょう。自然科学はまた、アジアという地域性と 関連付けられることも稀です。例えばアジアにおいて土着で かつ固有の医療技術、知識は最近になってようやく医療行為 の一環として認知されるようになりました。なぜならばここ 一世紀医療行為とはアジアにおいて西洋医学のことにほかな らなかったからです。生命科学、すなわち人間の性や生殖に 関わる技術や知識 ( 出産や避妊の技術、男女別医療など ) は 各地域に偏在しています。加えてその地域独自の技術や知識 は、西欧型のそれとの間にも複雑な関係を保ちながら現存し ています。これらの研究は、近年ようやく目を向けられ始め た分野といえます。今回のワークショップでは、このアプロー チに新たな可能性を見出すために日本国内外から研究者や活 動家などの専門家を招聘し、各国からの現状報告やトピック 別セッションを行う予定です。詳細は夏前を目安に随時 HP にて発信していく予定ですので、ご確認ください。これから も CGS をよろしくお願いします。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602001j.html

CGS 運営委員:加藤恵津子

The Natural Sciences can also be re-examined from a regional viewpoint. For example, various indigenous medical skills and knowledge are recently becoming recognized as part of medical practice. In the past century in Asia, the perception of proper medical practice has been restricted to western medicine. Skills and knowledge regarding human sex and reproduction (childbirth, abortion, gender-specific medicine, etc.) are unevenly distributed across the regions. Thus, traditional skills and knowledge still coexist in a complicated relationship with those of western medicine. This issue has in recent years has become a focus of research as a new field. The upcoming workshop seeks to explore fresh possibilities for this approach. Researchers, activists and specialists will be invited from Japan and overseas and the program will include country-specific reports as well as sessions on different topics. Please check our homepage for further details which are scheduled to be released before the summer.

Thank you for your continuing support of the Center of Gender Studies.

**full text-->** http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602001e.html
CGS Steering Committee Member: Etsuko KATO

# ▶特集:ジェンダーバッシング

## ジェンダーバッシング概要

昨今の日本では、「ジェンダーフリー」という言葉が、政治、 教育といった領域でバッシングの対象となっている。「ジェ ンダーフリー」という言葉自体はおおよそ「社会的性差 (ジェ ンダー)の押し付けから自由(フリー)になる」という意味 合いで用いられている和製英語である。この言葉を巡って 最初に議論が起こったのは、性教育に関する議論の中でのこ とだった。日本の性教育現場において、「ジェンダーフリー」 という言葉は非常に多く用いられてきた。しかし近年「ジェ ンダーフリー」に基づいた性教育は過激であり、伝統的な価 値観を壊すとの批判が多くおこっている。例えば、2005年 山谷えり子参議院議員が参院予算委員会の中で性教育の問題 を取り上げたことなどは記憶に新しい。当時の男女共同参画 担当相でもある細田官房長官は「社会的・文化的性差の解消」 という意味合いにおいてジェンダーフリーという言葉を「政 府は使っていないし、社会的に定義を示すことはできない。 できるだけ使わないことが望ましい」と述べた。しかしこの 発言の前に細田官房長官は「社会的・文化的性差の解消」と いう意味合い以外での「ジェンダー・フリー」の使用は自由 であると述べたことはバッシング派には黙殺されている。こ のような経緯で「ジェンダーフリー」という語の使用への牽 制は、1996年に国が制定した「男女共同参画基本法」を巡 る議論にも遡及的に影響を及ぼすようになったのである。

2005 年夏の衆議院総選挙まで自民党が組織していた「過激な性教育・ジェンダーフリー教育実態調査プロジェクトチーム」(現内閣官房長官安倍晋三氏が座長。山谷えり子氏も参加)は「ジェンダーフリー」という言葉そのものの使用をやめることのみならず、「ジェンダー」という言葉そのものについても「語の定義が曖昧である」ことを理由に正式な

# Feature:Gender Free Bashing

#### **Overview of Gender Bashing in Japan**

"Gender free" has become a target term for bashing in political and educational fields in Japanese society. The term is a Japanese coined one for the idea of "setting oneself free of socially imposed gender structure". The term attracted controversy in sex education discourse. In classroom activities, "gender free" is widely used, but the opposition group has raised the argument that education based on the discourse of "gender free" is too radical and destructive of traditional values. In 2005, senior political figures such as Ms Eriko Yamatani, LDP Upper House Member, and Mr Hosoda, the then chief Cabinet secretary and the Minister for gender equality made comments: Mr Hosoda stated that "the government does not use" nor "term its social significance" of "gender free" in the context of "reforming" the social implementation of gendered views, and the use of "gender free" is "undesirable in this context". Interestingly, the limited nature of Mr Hosoda's disapproval is ignored by the opposition group. This is the general context for the present pressure on the use of "gender free" and its retrospective influence on the argument surrounding the Basic Act for Gender Equality.

With the appointment of Ms Kuniko Inoguchi as the Cabinet Minister in charge of low birthrate and gender equality issues, the atmosphere within the Cabinet has seen some modification. 文書での使用を行わないように政府に求めている。

しかし、2005年の総選挙で当選した猪口邦子衆議院議員が内閣特命担当大臣(少子化・男女共同参画)に就任したことにより政権内の流れが変わったことも同時に注目すべき点である。この動きを受けて猪口邦子議員・佐藤ゆかり議員・片山さつき議員の三人が海外特派員クラブでの会見で「私たちがジェンダーバッシングを許さない」と明言しており更なる変化が期待される。しかしその一方で、猪口大臣の大臣政務官に上述の山谷えり子参議院議員が就任しており、両者の対立が予想されるのも事実である。現在のところは意外にも猪口氏の意向をくむ形で議論は進んでいる模様だが、山谷氏も持論を曲げる様子はなく、今後も、ジェンダーフリーの概念を男女共同参画基本法の基本計画に盛り込むか否かという問題を巡っての議論が活発に展開されることが予想される。

このように現在、「ジェンダーフリー」という言葉を巡って、政府・国会周辺では男女共同参画法と性教育の問題を中心に議論が進められているといっていいだろう。2005年12月22日の時点で内閣府は、「ジェンダー」を「社会通念や慣習の中には、社会によって作り上げられた『男性像』『女性像』があり、このような男性、女性の別」と定義し「性差別、性別による固定的役割分担、偏見等につながっている場合もある」とする一方で、「性差を否定したり、男らしさ、女らしさや男女の区別をなくして人間の中性化を目指すこと、また、家族やひな祭り等の伝統文化を否定することは、国民が求める男女共同参画社会とは異なる」ともしている。いわばどちらの陣営にも配慮した説明だが、この膠着状態がこの先どうなるのか、一度議論の俎上にあがったジェンダーフリーバッシングの流れは今後も続くのか、注意深く見守りたい。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602002j.html

ICU 大学院:平野遼

A further move has been anticipated after Ms Inoguchi's joint statement with Ms Yukari Sato and Ms Satsuki Katayama, both House Members, for their clear stance against the back lash side at the foreign correspondent club. On the other hand, the appointment of Ms Yamatani as a ministerial aid for Ms Inoguchi leaves the possibility for future conflict within the Cabinet. For the time being, the discussion is savouring Ms Inoguchi, but speculation for a heated debate on the issue of reflecting "gender free" in the Basic Proposal for the Basic Act for Gender Equality remains.

"Gender free" has been focus of the debate in relation to the act for gender equality and the sex education. On 22 December 2005, the Cabinet has issued a carefully balanced statement, that "gender" is a "difference based on the socially and culturally constructed ideas for "manhood" and "womanhood" which sometimes causes "gendered prejudice", but "neutralizing gender relations" or deny "traditional culture" is against "the gender equality the people aspire". It is our task to monitor the outcome of this present political stand-still.

**full text**--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602002e.html ICU Graduate Student: Ryo Hirano

## 山谷えり子講演会

2005年6月14日、三鷹市産業プラザにて参議院議員山谷えり子さんの講演会が開催された。この講演会は、「『男女共同参画』に隠された問題をただす!!」と題され、その内容・形式はともに、まさにバックラッシュの「講演会」と言うにふさわしいものであった。

今回の「講演会」には当然ながら様々な問題があると感じたが、たとえば山谷さんが講演のなかで提示した各「具体的」エピソード自体が、出典やデータなど一切示されず追検証不可能であったのも大きな問題点の一つである。しかしより問題含みだと思われたのは講演会全体の構成そのものである。「権威ある」来賓からの紹介を交えることによる山谷さんへの権威性と正当性の付与、山谷さん自身の「活躍」の様子のビデオを上映することによる、権威性の強調。そして何より続く山谷さん自身の講演が、強く情動に訴えるかたちで行われ、聴衆に一方的に情報が注ぎ込まれ、そして最後にはスローガンを唱和し、会場全体の高揚感・一体感を強くあおる形で「講演会」が締めくくられたこと。感情に訴えかけるこの構成は、まさにプロパガンダのテクニックを駆使したものといえる。

このようにバックラッシュ派が、くすぶっている市民の不安を巧妙なテクニックを駆使して煽り、ジェンダーの概念を否定する運動を広めていこうと画策しているような状況では、不安をもたらしているとされる誤解の一つ一つを解き、ジェンダーはこれまでの人生を否定するものではないという合意を形成し、不安を解消していくことが、ジェンダー研究に携わる者の課題の一つといえる。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602003j.html

CGS 編集部

### 性教育バッシング

近頃、性教育やジェンダー・フリー教育に反対する声が 喧しい。このレポートではバックラッシュ派がまさに批判し ている当のジェンダーフリー教育の言説に対して、私が常々 感じている違和感について考察してみたい。

「ひな祭りやこいのぼりは女らしさ、男らしさの押し付けになりかねない」といった、伝統行事に潜む「害毒」などを指摘するジェンダーフリー言説は、実はそれ自身こそが新しい「正しさ」の押し付けではないかという批判にしばしばさらされてきた。確かにこういった新しい正しさの導入には問題があると言えるだろう。しかし私は、ジェンダーフリー言説が何かを「押し付け」ていることのみに違和感を抱いているわけではない。私が違和感を抱くのはむしろ、その「押し付け議論」の組み立て方、つまりそれが正しいとされる「理由」・「論拠」から議論をはじめることに対してなのだ。そのようなやり方にはいくつかの問題点があるように思える。

まず第一に、論拠からいつも出発することによって、論拠なしで発言することの価値が不当に下げられてしまわないだろうか。また第二の問題点として、論拠から主張を始めることによって、議論が論拠に関するものだけに矮小化されないだろうか。論拠の説得力が疑わしいとされた場合、効力を失うのはその論拠ばかりでなく、論拠なしでなされる発言も含まれるのではあるまいか?結果的に私は口をふさがれてしまうのではないだろうか?最後に、論拠を並べ立てることで、人のこころを動かすことはできるのだろうか。

こういった日々感じてきた疑問についてここでもう一度 考察してみたい。

> 全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602004j.html ICU 大学院:鈴木直美

## Eriko Yamatani's Lecture

On June 14, 2005, Upper House member Eriko Yamatani gave a lecture at the Mitaka Sangyo Plaza. Entitled "Redressing the Hidden Problems of 'Gender Equality'", it was a classic example of backlash in both content and form.

One problem was that the incidents presented by Ms. Yamatani could not be verified. The overall structure of the lecture was also problematic – there was an emphasis on power, with the unquestioning acceptance by the audience of the speaker's authority, and video footage of her various "activities". Ms. Yamatani spoke in a style which appealed to the audience's emotions, fed them one-sided information, and, finally, incited a sense of unity and euphoria throughout the hall with the chanting of a slogan. One could even say that this so-called lecture freely utilized the techniques of propaganda.

Backlash groups are fueling public anxiety by denying gender concepts and giving rise to the misunderstanding that gender negates the way we have lived our lives so far. I think that it is one of our tasks as gender researchers to dispel these anxieties and misunderstandings.

full text--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602003e.html

CGS Editorial Committee

## **Gender Education Bashing**

In recent years there have been many voices raised in opposition to gender-free education. In this paper I discuss some of my own concerns regarding the claims of gender-free education which have been criticized by the backlash groups.

The gender-free argument that certain traditional rites such as Girls Day and Boys Day impose standards of femininity and masculinity have conversely been criticized for introducing a new standard of "correctness." Although I agree with this criticism, I also think that there is a fundamental problem with the actual structure of the argument itself and the idea that arguments must begin with a "reason" or "rationale".

Firstly, if one must always begin with a rationale, does this lower the value of statements without a rationale? Secondly, beginning with a rationale can often shift or narrow the scope of the argument. If the persuasive power of the rationale is suspect, is it not only the rationale which loses effect but also statements which are made without a rationale? If so, will I be unable to speak out? Finally, can one stir people's hearts by simply lining up rationales?

full text--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602004e.html

ICU Graduate Student: Naomi SUZUKI

## 公序良俗に負けなかった女たち

2005年10月21日、CGS・就職相談室の共催による講演会「公序良俗に負けなかった女たち」が行われた。講演者は、住友電工男女賃金差別裁判の元原告の一人である西村かつみさんと、同元弁護団長の宮地光子弁護士。同裁判の内容は NL001号でお伝えした通りだが (HP上でも公開中)、今回の講演会では、日本における雇用の実態について知ることができた。

現在、雇用における問題の中心は間接差別だ。その代表的な例が、女性に対するものである。主に女性が占めていた一般職の採用は減る一方であるのに対し、総合職における女性の割合は未だに1割程度といわれている。これは事実上、女性を正規雇用の仕事の現場から排除しているといえるのではないか。

また、パートタイムや派遣など、正社員とほとんど変わらない仕事をしているのに、賃金は大幅に低い状態にあるような雇用形態も問題である。とりわけ、現在パートタイム労働者・派遣労働者の実に7割近くが女性である。未だに女性が多くの家事・育児労働を担っている状況下において、女性がパートタイム労働や派遣労働を選択せざるを得ないという社会的問題を忘れてはならない(平成14年版及び15年版「働く女性の実情」)。

今年、均等法は改定される予定だ。いま、そこに間接差別の禁止が盛り込まれることが強く望まれている。もし実現すれば、雇用における問題は大きく改善されるはずだ。今回の講演者の二人も、そのような実効力のある均等法にするため日々活動している。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602005j.html

国学院大学法科大学院:田口辰則

## News from CGS

#### **Women Who Refuse to Give In**

On October 21, CGS and the ICU Job Counselling Centre cohosted a program entitled 'Women Who Didn' t Give in to Public Order and Morality". The speakers were Ms Katsumi Nishimura, a plaintiff in the gender discrimination case against Sumitomo Electric Industries, and Ms Mitsuko Miyachi, who headed the counsel for the plaintiff. (Details of the case were reported in newsletter no.001.)

The lecture was on the realities of the employment situation in Japan. Indirect discrimination, the central issue in the case, most commonly involves women. It has deprived large numbers of women of permanent employment opportunities and has forced them into unstable part-time or temp-staff positions in which they bear almost identical responsibility to those who hold full time positions, while being paid considerably less. Women constitute 70% of these workers. They must then compromise their time between home and workplace, in a society where housework is still considered a woman's responsibility.

The Equal Employment Act is due to be revised this year and it is strongly hoped that there will be a ban placed on indirect discrimination in order to improve working conditions in Japan.

**full text-->** http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602005e.html Japan Gender Law Research Network: Tatsunori TAGUCHI

## 化学史講演会

2005年10月26日、川島慶子助教授(名古屋工業大学) の講演会「ラボワジェ夫人: 化学革命に参加した女性」が行 われた。化学者ラボワジェは 18 世紀の化学革命において重 要な役割を果たした人物だが、その夫人マリーも翻訳や論文 の脚注執筆などを通して夫に協力した。しかし、従来の科学 史は、ラボワジェの伝記のなかでその点にごく簡単に触れる だけで、彼女が何を考えどのような動機で化学革命に参加し ていたのかは明らかにしてこなかった。今回の講演会は、彼 女がいかにして化学に関るようになり、その中で何を考えて いたのかを明らかにし、従来の科学史では見落とされていた 女性である夫人自身の観点から科学革命を見直そう、という 趣旨だった。川島さんは、啓蒙主義者であった父に育てられ た夫人はより積極的に科学に携わることを臨んでいたとし、 名誉男性としての扱いという科学におけるジェンダー規範内 での成功にジレンマを感じていたのでは、と推測した。男性 中心的な社会の中で成功を収めたように思える夫人である が、女性であったが故に重要ではあってもあくまでも補助的 な作業にしか携われず、実際はその成功もラボワジェの成功 に付属するものであった。川島さんは、夫人の後年の行動な どからそれが夫人の望む科学への参加ではなかったことを明 らかにすることで、現在の科学史において女性の存在が見落 とされていること、科学史研究にジェンダーの観点が必要で あることを主張した。また、女性を科学から排除するような ジェンダー規範は未だに現存し、その点をも批判的に捉えて いかなくてはいけないとも述べた。現在も科学に従事する女 性は依然少なく、こういった視点は重要であろう。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0601003j.html

ICU 学部:河村翔

## **Women in the History of Science**

On October 26, 2005, Keiko Kawashima(Nagoya Institute of Technology), a science historian, gave a lecture entitled "Madame Lavoisier: The Woman Who Participated in the Chemical Revolution." Antoine-Laurent Lavoisier is often called "The Father of Modern Chemistry" for his part in advancing chemistry in the 18th century. Although his wife, Marie, helped him by doing translation and writing footnotes, she has been overlooked in traditional histories of science. Marie Lavoisier achieved great success in the male-dominated world of chemistry, but her achievements were made as a mere assistant to her famous scientist husband. Ms. Kawashima suggested that Marie wanted to play a more active role and was frustrated by the restrictions placed upon her gender.

Using Lavoisier as an example, Ms. Kawashima argued that the role of women in the world of science has been overlooked. Though it has become much easier for women to participate in the world of science today, their numbers are still scarce. In order to change the deep-rooted view that science is a man's domain, we must reconsider scientific history from the perspective of gender.

full text--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0601003e.html

ICU Undergraduate: Sho KAWAMURA

## 「オネエ言葉」と日本語のジェンダー言説

2006年1月14日、ICUにて、津田塾大学英米文学科よ りクレア・マリイ氏を迎え、「言語上のネゴシエーション―「オ ネエ言葉」と日本語のジェンダー言説」と題された講演会が 行われた。

氏は、「オネエ言葉」の持つ演劇性を取り上げ、「オネエ 言葉」を話す人物の行っていることが、一種のパフォーマン スとして周囲の人々を普段とは異なった世界、すなわち「非 日常の世界」へ連れてゆく作業であると述べた。たとえば、 バートークにおいて「ママ」は、オネエ言葉を用いることに より客を日常世界から解放させ、また客もそれを求めて「マ マ」の元へと集う。ここではオネエ言葉は演劇的であり、別 の自分を可能にする手段なのだ。またオネエ言葉はセクシュ アルマイノリティ間で連帯感を生む上でも役立っているとい う。

氏は現在のメディアでオネエ言葉を話す芸能人にも言及 した。例えばおすぎとピーコの人気は、彼らの個人的な能力 によるだけでなくセクシュアルマイノリティに対する社会的 受容の拡大もあっての事である。これについては面白い指摘 があった。美輪明宏やピーターが表象していたものと、現在 おすぎやピーコが表象しているものの間には違いがあり、こ れら二つの世代には大きな断絶がはっきりと見て取れるとい う。氏は、オネエ言葉をめぐる世代間の断絶がどういったも のであり、なぜおきたのかという点は今後の研究課題とされ ていた。

講演後には多くの質問も飛び出し、オネエ言葉は実社会 において人々の関心を集めていると感じられた。「談話言語」 であるオネエ言葉が、日常生活により近い話題だからこそ 人々の関心も高いのかもしれない。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602006j.html

ICU 学部:田中洋兵

## 映画評:メゾン・ド・ヒミコ

この映画は一見、セクシュアリティと家族を描いている かのようだ。物語は、借金を背負い塗装会社の事務員として 働く沙織(柴崎コウ)を、春彦(オダギリジョー)が訪ねて くるところから始まる。春彦は、沙織がその存在すら否定し たがっているゲイの父親・卑弥呼(田中泯)の恋人だ。卑弥 呼の運営するゲイのための老人ホーム「メゾン・ド・ヒミコ」 の手伝いを春彦から打診された沙織は、高額の時給に引かれ て了承する。騒々しくもどこか悲しげで老いたゲイたちとの 触れ合い、そして春彦との微妙な関係などを通して、彼女は 父、卑弥呼と向き合っていく。その過程ではセクシュアリティ のあり方故に家族から切り離され、仲間たちと寄り添うよう に生きているゲイたちが、晩年家族との対峙を余儀なくされ る姿も描かれている。

しかしこの映画は、沙織が務める塗装会社の専務、細川(西 島秀俊)を巡る女性社員の争いを丹念に描くことによって、 普遍的とされる異性愛規範をも同時に描き出し、相対化して いく。会社での女子社員の権力が細川との性的な関係を担保 に保証されるという構造が描かれているのだが、この構造は、 まさしく非対称的な男女間のセクシュアリティの交換を正当 とみなす、異性愛規範に基づいているのではないか。

細川がこの構造とは距離を置く沙織・春彦と関わること で、今まで問われなかった彼のセクシュアリティが相対化さ れ、ひいては構造自体が非普遍的だと映画は暴く。すると、 一見ゲイを巡る物語のように思えるこの映画が、異性愛規範 を問うているようにも思えてくる。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0601005j.html ICU 学部:川口遼

#### **Onee kotoba and Japanese Gender Discourse**

On January 14, Professor Claire Maree (School of English and American Literature, Tsuda College) gave a lecture at ICU entitled "Language Negotiation -Onee kotoba and Japanese Gender Discourse". She discussed the theatrical characteristics of onee kotoba ("Drag queen talk" used by gays) as a kind of performance which transports listeners to another world. This explains why, in bar talk, the customers are drawn to the "mama" who uses onee kotoba to free them from the mundane everyday world. Onee kotoba also serves as a means of bonding for sexual minorities.

Prof. Marie then discussed entertainers who use onee kotoba in the media today. The popularity of stars like Osugi and Piiko is not due simply to their individual abilities but also to the increasing acceptance of sexual minorities in society. A clear break can be perceived between what the present and past generation of stars represent and Prof. Marie proposed the study of this generation gap as a topic for future research.

The many questions from the audience afterwards indicates the growing social awareness of onee kotoba. Perhaps because it is a conversational language it is a topic which is close to our daily lives.

full text--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602006e.html

# FILM REVIEW: Maison de Himiko

The film Maison de Himiko is set in a gay nursing home. It depicts the relationship between Saori (Ko Shibasaki), who works at a painting company, her father, Himiko, who owns the nursing home, and his lover Haruhiko (Odagirijo).

The inhabitants of the nursing home, in the final stages of their lives, are forced to face their families from whom they have been estranged due to their sexual identity. At Saori's workplace, the female employees compete for the attention of the executive director Hosokawa (Hideaki Nishijima). The structure which enables them to gain power in the company through having sexual relations with the director is based on the heteronorm and the approval of an asymmetric exchange of male-female sexuality. Ultimately, the universality of the heteronorm itself is challenged as Saori distances herself from it, and as Haruhiko becomes involved with Hosokawa, relativizing his as-yet unquestioned sexuality.

Thus, the film appears on the surface to be a story about gays, but can also be interpreted as questioning the heterosexual model of human relationships.

full text--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0601005e.html

ICU Undergraduate: Ryo KAWAGUCHI

# 日本からのニュース

## バトラーから何を学ぶのか

ジュディス・バトラーがようやく来日を果たした。『ジェンダー・トラブル』が世に出て 15 年以上、その著書として現在の問題関心をいかに語るのかに興味と期待が集まったが、同時に、今あらためてそこから何を学ぶのかを考え直すことが、聴衆にとっての課題だったのではないかと思う。

2006年1月12日、ICUでの学生を中心とした座談会では、まず「バトラーによるバトラー入門」とも言えるような短いスピーチがあった。バトラーはこのスピーチで、「構築された存在としてあらかじめ必然的に他者に依存し他者に制約されている人間が、にもかかわらずいかにエイジェンシーを維持しうるのか」という問題に触れたのだが、存在の根幹における人間の他者への依存というこの問題こそ、『ジェンダー・トラブル』以来の彼女の一貫した論点の一つであると言ってよい。この問題は、近年の著作ではとりわけ「承認」の問題として、すなわち、誰が人間としてその存在を「認められ」るのか、どのような理由、どのようなやり方で、特定の存在が人間として「認められず」、それがどのような結果をもたらすのかという問題として、論じられている。

承認の可能性を拡大するということは、すでに存在する 承認の枠組みから外れる存在をその枠組みの中に取り込むこととは違う。座談会で、「あなたの理論は exclusion を批判 するものだが、それは inclusion を目指すということか、イ エスかノーで言うならどちらだろうか」という問いに対して、 バトラーが明確に「ノー」と答えたことが、つよく印象に 残っている。重要なのは、承認の枠組みを維持したまま、うっ かり見落としてきた存在を一つ一つ拾い上げてその枠組みの 中に取り戻すことではなく、枠組みそのものを常に疑い、揺 り動かそうとすることなのだ。たとえその試みによって私た があったとしても、あるいはすでに承認の枠組みから外されている場合にはその枠組みの中へととりあえず滑り込むことが難しくなる可能性があったとしても、承認の枠組みを批判し、不安定にすること、バトラーにとってはそれこそが批評critique なのだという。

ち自身が承認の枠組みから外されてしまうかもしれない危険

そのような意味での批評は理想にすぎないと言えなくも ないが、かといって、私たちがせめてできる範囲で承認の問 題に取り組む必要がなくなるわけではない。ジェンダーフ リーは同性愛者や GID (性同一性障害) を生み出すという 主張に対して「仮にそうだとしても、何がいけないのか?」 と問い返すこと。「承認」の問題はそのような身近なレベル で既に存在しているのであり、私たちが最低限のそういう問 い返しすらせずにいるとしたら、私たちはバトラーから何も 学ばなかったのだ。あるいは野宿者のテントはそもそも不法 占拠だから大阪での強制排除は仕方がないという意見に対し て私たちが沈黙を守るとしたら、私たちは有名人を見て楽し いひと時を過ごしただけで、やはりバトラーから何も学ばな かったのだ。私たちが社会のさまざまな場で承認の枠組みを 問い直し続けるのでなければ、バトラーの考察はただの抽象 的な概念操作にすぎない。たとえそれが微少で不十分なもの であったとしても、具体的な場における生存の可能性を拡大 しうる力をその考察から引き出そうとしてこそ、私たちはバ トラーの来日講演で何かを学んだと言えるのではないだろう か。

> 全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602007j.html 中央大学専任講師:清水晶子

# News from Japan

## What do we learn from Butler?

When Prof. Judith Butler arrived in Japan over fifteen years after the publication of *Gender Trouble*, expectations centered on how the author was going to talk about her current research interests. However, as the audience, our task was to figure out what we, living in our time and place, could learn from her.

The seminar at ICU on January 12 started with a short introductory speech where Prof. Butler raised the question of how it is possible for us to be constrained by one another and to also have free will. This question of dependence on each other in order to exist is what Prof. Butler has explored since *Gender Trouble*. In her more recent works, this has been increasingly discussed in relation to 'recognition': who is recognized as 'human', how and why are certain beings not considered human, and what does the lack of recognition entail for them?

Expanding the possibility of recognition is not the same as once again recognizing what has come to be ignored. Indeed, when asked whether her critique of exclusion aims at inclusion, Prof. Butler answered in the negative. The aim is not to return the excluded existences to the stable boundries of the existing domain, but to question the boundaries themselves, and destabilize them. Even if doing so could risk one's status as a woman, a member of a society,

a right-bearing subject, or a human, and, even if the attempt might make it more difficult for us to gain recognition, we might still have to critique the boundaries of the domain.

Although such a critique cannot be easily achieved, we should still attempt it even if we can only be partially successful. The issues of recognition can be found everywhere around us: when someone argues that 'gender-free' will create homosexuality and GID, not only should we tell them that they are mistaken, but we should also say to them, Even if so 'So what?' If we do not even question the domain of recognition when it appears in its most in our dailylife, we have learned nothing from Prof. Butler. Her theories are only abstract concepts if we do not utilize them in order to question the domain of recognition of the culture and society we live in. It is up to us to make them work to shake the outframe of recognition in our own society, and perhaps only then will we know what we have learned from Prof. Butler.

**full text-->** http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602007e.html
Chuo University Lecturer: Akiko SHIMIZU

## ジェンダー法学会

2005 年 12 月 3 日・4 日と、雪のちらつく宮城県仙台市 において日本ジェンダー法学会 (JAGL) の学術大会が開催された。個人的に最も興味を持ったのは、2 日目の若手研究者 による個別報告だった。

今回の報告は、大西祥世さん(法政大学)による「女性に 関する人権保障と当事者主体の人権救済」と、吉川真美子さ ん(お茶の水大学)による「デュー・プロセスのジェンダー 化―米国のドメスティック・バイオレンス加害者の逮捕につ いて」の2本。両者の報告を聞いて興味深く感じたのは、2 人が扱うテーマの対比である。大西報告が扱っているのは、 制度による上からの画一的な紛争解決ではなく、当事者意思 を尊重した主体的な紛争解決を考えるものである。これに対 して、吉川報告が扱っているのは、当事者である被害女性の 意思を口実に私的領域への介入を手控えてきた警察を制度で 縛ることによって、画一的かつ強制的に被害女性の生命と身 体の安全を保護しようとするものとして対比できる。もちろ ん、硬直化して当事者を置き去りにした制度から主導権を取 り戻すことが重要である反面、当事者の意思を理由に一切を 自己責任に回収する議論にも注意しなければならない。とり わけ、新自由主義的な自己責任論が強調される昨今において は、パターナリズムにも肉薄する後者の視点が重要になって くるだろう。

どちらの報告も、女性が被害者となる具体的な事例を分析しながら、翻って、従来の法理論が前提としてきた概念の再構成を企てるという、まさにジェンダー法学の可能性を感じさせる力強い報告だったと思う。次回の第4回大会は、2006年冬、お茶の水大学にて行われるとのことだ。

**全文** --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602008j.html 大阪大学大学院:久保田裕之

### LGBT 雑誌の盛衰

近年、LGBT 雑誌業界の浮沈が著しい。ゲイ専門誌の老舗「薔薇族」は04年11月に廃刊になり、05年4月に復刊したが、再び06年1月号をもって廃刊となった。また02年創刊のレズビアン専門誌「カーミラ」も05年12月発刊のVol.10をもって終了した。しかしその一方で05年12月には、タワーレコードからLGBTを対象とする初のライフスタイルマガジン「yes」が新しく発行されてもいる。

90年代末より、LGBT 雑誌の編集方針は需要に応じて変化してきた。90年代まで、地方在住のLGBT が出会いを求め相互にコミュニケーションをとる上で、雑誌メディアは貴重な通信手段であった。この時「薔薇族」や「さぶ」といった老舗のゲイ専門誌がそこで果たした役割は大きい。また、一般的にはあまり流通していなかったゲイ向けのポルノグラフィーの掲載・紹介という重要な役割も担っていた。

しかし、最近は携帯やインターネットの普及により、そういった役割が雑誌メディアに求められることがなくなり、90年代後半より創刊された「クィアジャパン」、「クィアジャパンリターンズ」、「にじ」といった雑誌では、LGBTが抱える生活上の問題や社会的な立場が主なテーマとして取り上げられるようになった。

そんな中で、今回創刊された「yes」は、ポルノやコミュニティー情報を排し、映画情報やイベント情報をLGBT の視点で発信する方針を採っている点に特徴がある。「yes」は、LGBT のみでなく他の購買層をも視野に入れる編集方針なので、LGBT 以外の人にも「情報誌」として認知されることに成功しつつあり、新たな可能性を伺わせる。この雑誌がアメリカで 6000 億ドルともいわれる LGBT 市場を日本でも開拓する端緒となるか。注目し続けたい。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602009j.html

ICU 大学院:平野遼

#### **JAGL Conference**

The Japan Association for Gender Law (JAGL) academic conference was held in Sendai City on December 3 and 4, 2005. I was particularly interested in the individual reports by young researchers. Prof. Yoshiyo Onishi (Hosei University) reported on "Women's Human Rights and Subject-oriented Human Rights Protection" while Prof. Mamiko Yoshikawa (Ochanomizu Univ.) spoke about "Engendering Due-process" - On Arresting Domestic Violence Perpetrators in the U.S." The two had contrasting approaches. Onishi's report supported a person-oriented conflict solution against a policy-oriented one. Yoshikawa's report dealt with the implementation of institutional stricture on the policing system which has practiced a non-committal policy in the private sphere, claiming a respect for the victim's will in order to forcibly protect the victim's physical safety. Reclaiming initiative from an inflexible system is of course vital, but we must also exercise caution against the current of citing the will of the concerned party as a political talisman, making self-responsibility the ultimate basis for dealing with human rights breaches in the private sphere. The 4th conference will be held at Ochanomizu University this winter.

**full text**--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602008e.html
Osaka University Graduate Student: Hiroyuki Kubota

## **LGBT Magazines**

Last autumn, two Japanese LGBT (Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender) magazines were discontinued, the gay magazine, *Barazoku* and the lesbian magazine *Carmira*. At the same time, the first LGBT lifestyle magazine, *yes*, was released by Tower Records.

Since the late 1990s, a number of LGBT magazines have been launched for various readerships. Traditional gay magazines primarily featured pornography and gay event listings, while others focused on LGBT-related lifestyle and social issues. Magazine *yes*, however, favours film and event listings from an LGBT perspective and thus succeeds in attracting a wider non-LGBT readership as well.

This indicates a change in what readers seek from popular print media. Magazines in the 1990s were important as a meeting point for LGBT's in regional areas but this need diminished with the increase of cellular phones and the internet. Instead, the late 1990s saw a run of new magazines which list community information and cover issues with a more scholarly focus.

The launch of *Yes* could be the first step toward pioneering the development in Japan of a large LGBT market comparable to that in the United States.

full text--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602009e.html

# アジアからのニュース

# マレーシア:ジェンダーリサーチセンター

2003 年 7 月に設立されたジェンダーリサーチセンター (CGR)、マレー名 Pusat Penyelidikan Gender (PRG) はマレーシア国立ケバングサン大学 (UKM) 社会人文科学科に所属する研究機関である。ジェンダー研究における国家および地域調査研究機関として、CGR はマレーシアおよび東南アジア全域に住む人々の QOL 向上への貢献が見込まれる関係諸分野においての知識および経験の集積に寄与することが使命であり、UKM 内外の研究者に分野横断的ネットワーク形成の場を提供することを目標としている。

CGR は今後 3 年から 5 年をかけてマレーシア国内のみならず東南アジア全域にわたるジェンダー研究の包括的な拠点となることを目指している。これは UKM の掲げる国際化の目標とも連動するものである。また、私たちと思考を共有する他の研究機関との連携を深め、ジェンダー研究の将来を担う研究者および学生を広く迎え入れることを目指している。

全文 --> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602010j.html

マレーシア国民大学:ラシーラ ラムリー

## アジア認識とジェンダー

2006年1月7日、お茶の水女子大学にて「アジア認識とジェンダー」研究会シンポジウム「東アジアの『戦後』60年: 軍事化とセクシュアリティ」が開催された。北朝鮮を脅威としながらナショナリズムが台頭する東アジアの軍事化と、ジェンダー・セクシュアリティとの関連について、韓国、日本、中国の現状から興味深い報告があった。基調報告で講演した権仁淑さん(明知大学校、韓国)は「韓国の軍事化とマスキュリニティ」と題し、50年代から70年代における韓国で、経済的、軍事的に強い国家を構築するために、女性性と男性性がどのように規定されていったかを報告した。

50年間存続する徴兵制によって、韓国人男性は、自己犠牲を厭わない軍隊内の階級的地位秩序を内在化する。一方、女性は補助的、従属的存在として規範的な女性性の枠内で国家に利用されると同時に、そのセクシュアリティは伝統的価値観の下に統制される。例えばセックスワーカーや工場労働者は、破壊された女性性を持った存在として位置づけられ、国家主義的価値観や高い教育、結婚などで女性性を補完することを余儀なくされる。

このような女性たちは国家の経済、軍事的利益のために 積極的に動員されながらも、保護する必要のない存在とされ ている。そして、その搾取は同時に「規範的な女性像」を強 化しもする。軍事化とセクシュアリティの管理が連続してい るとする権さんの報告は、国家の安全保障を国家間のパワー バランスのみで議論する暴力性を再確認させるものだった。

全文--> http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602011j.html

ICU 学部:金子活実

# News from Asia

#### Centre for Gender Research, UKM

The Centre for Gender Research (CGR), or in Malay, Pusat Penyelidikan Gender (PPG) was established in July 2003 under the administration of the Faculty of Social Sciences and Humanities at the Universiti Kebangsaan Malaysia (UKM).

As a national and regional research and resource centre in gender studies, our mission is to enhance knowledge and expertise in the field that will contribute to the improvement of the quality of life in Malaysia and Southeast Asia. CGR seeks to bring together a network of scholars from a variety of disciplines from within and outside UKM.

In the next three to five years, CGR strives to be a focal point for gender research not only in Malaysia but in Southeast Asia. This is in line with UKM's mission of internationalization. In order to achieve this goal, we hope to foster relationships with like-minded institutions and to welcome researchers and graduate students as associate fellows or interns for future work on gender studies.

#### **State Security and Gender**

On January 7, 2006, a symposium entitled "60 years of 'post-war' in East Asia: Militarization and Sexuality" was held at Ochanomizu University. It featured reports on the relationship between militarization and gender/ sexuality, focusing particularly in China, Japan and South Korea. Prof. Kwon Insook's (Myongji University, Korea) lecture on "Korean militarization and masculinity", discussed how models of femininity and masculinity had been constructed in South Korea from the 1950s to 1970s in order to build an economically and militarily powerful state.

The conscription system for the past 50 years has created a belief that men should willingly sacrifice themselves for the state and that women should serve the state and men as subordinates. Prof. Kwon gave sex workers, factory workers as an example. They are not only stigmatized as "fallen women", but are used also to construct a model of "true femininity "for other women.

This lecture made me realize that state security is not simply about balancing power relations between nations.

**full text-->** http://subsite.icu.ac.jp/cgs/article/0602011e.html